

2022年(R4年)

2月

No. 358

ひとは福しん



社会福祉法人 ひとは福社会

〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

「緊急発信・コロナ禍を前に」

2022年もコロナ禍にすっかり惑わされ、見えぬ敵を前に右往左往させられています。沖縄での感染のすさまじさを目の当たりにしながらも、まさか広島ではと
 思っていましたら、見る見る間に感染爆発。研究会イベントも軒並み中止に追い
 込まれています。沖縄と広島に共通するのはご存じの通り米軍基地を抱え(広島は
 隣県の岩国市ですが)、治外法権的に往来が緩やかだったことに起因しているようです。
 ひとはの在所属安芸高田市でも、瞬く間に20名を超える感染者が出ました。職員と
 しても、何とかきららの人たちへの感染を防ごうと四苦八苦しています。心身の疲労も大変な
 ものと思いますが、その努力には頭が下がります。感謝、感謝です。

もちろん、きららの人たちも、見えない敵を前にどのように対処すればいいかわからな
 いまま、現状を受け入れざるを得ない事態にストレスをため込んでいます。にも
 かかわらず、当たり前前に活動力に取り組んでいる姿には、我ながら頼もしく感じて
 います。

一日も早くこのような状況から解放されることを願わずにはおれません。

お互いに少しでも早く収束するよう自律的な予防に努めていきましょう。

(理事長 寺尾 文尚)

スタッフ紹介

名前 丸岡 北斗

所属 共同ホームひとは

(ほめてあげたい過去の自分)

野良猫にミルクをあげていた
 優しい自分



ひとはスタッフが出張講師を行いました。

○2021年9月 向原中学校 1年生のクラスにて 出田 広志

「ひとはと地域とのつながり～縄文あいの取組を通じて～」
 障害のある人でも、共に働くことでお金を稼いで、美味しい物を作っていること、
 縄文あいを通じてひとはのおもいや一人一人の頑張りを発信していきたいことを伝えました。
 クラスの中には、彼らが小学生の頃、監督である私と野球で関わっていた子がいます。
 中学生だと少し大人になっていたので、どう興味を持って聞いてもらえるか、人への伝え方は
 まだまだこれから勉強していきたいと感じた時間でした。



絵(社福)あさみ
 大谷 阿子

○2021年12月 広島北特別支援学校 中学部 3年生のクラスにて 佐々木 美春

「はたらくために大切なこと」
 事前に、生徒さんに得意なことや好きなことを紙に書いてもらい、席を回り、用意
 していた箱に入れてもらいました。その時に一人ずつと会話することから始め、良い笑顔で
 答えてもらったことが印象に残っています。(はたらくために大切なことの一つとして、自分の
 得意や好きが強みになって、仕事につなげることができると話をする中で、私ももと
 周りの人の「好き」を尊重していきたいなと逆に学ばせていただきました。



(絵:中増 雅晃)

○2022年1月 向原小学校 4年生のクラスにて 松本 拓也・竹内 宏美

「ひろげようふれあいの輪～みんな違って、みんないい～」
 これから大人になっていく児童達に、私達がひとはで働いて、人と関わるこ
 によって感じたこと、一人一人に違いはあることを伝えたいと授業を考えました。
 出会った時にひとはの松本さん! ひとはの竹内さん! と呼ばれるようになって
 いたら嬉しいです。

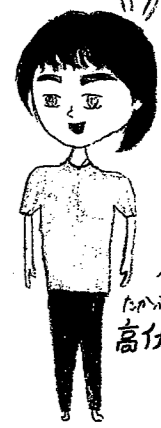


イラスト
 高伏 洋和

「朝の挨拶は『パンで!』」

ひと

「おはようございま〜す」と出勤すると、菅田さんが「今日はパンで」と言ってくれます。「は〜い、わかりました」と返事をします。菅田さんは以前、朝食にご飯を食べられていたことが、ここ数ヶ月、パンを選ばれるようになりまして。ホームの朝食は、パンかご飯か選ぶことができます。こんな挨拶が代わりのようなやりとりが続けばいいな〜と思っています。
(食事部 迫岡 明枝)

「一歩、一歩」

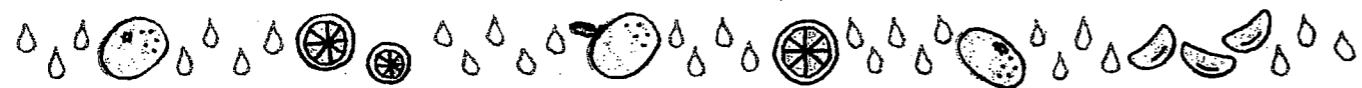
はの

作業所で勤務を始めた頃のこと。その日、奥田さんの歩行支援をしようと、一緒に歩こうとしたが、私のぎこちなさが伝わったのか、最初の一歩が踏み出せずにいました。互いに手に汗握っていたその時、「いち、に、いち、に」と背後から声が。末田さんが声援を送っていたのです。それに呼応するかのようになり、奥田さんの一歩が出て共に歩き始める事ができました。あれから4年、今では手を添えるだけで軽やかに歩いている姿があります。
(ひとは作業所 村井 康二)

「本物にふれる」

日

昨年の11月、私の友人でピアニストの高橋まりあさんを招いて、ミニコンサートを開催しました。くらむほんの活動として、プロの演奏家を招くのは初めての事です。普段外遊びが大好きな凜くんは、コンサートの始まる椅子に座って演奏に聴き入り「弾いとるところ(手元)が見たい」と言って途中からステージ下に移動するほど惹き込まれていました。お迎えの時に、お母さんに感想を聞かれると「うーん、よかったよ」とあっさりした返答。しかし目はキラキラしており、言葉はなくても十分に伝わってきました。
(くらむほん 白井 くみこ)



語り継ぎたいこと

— ころえ帖 改訂版 —

現場には、学びの

材料 どこにでも

(字・水附 美江)

昔、プロ野球のある監督が選手たちに「銭はグラウンドに落ちていゝぞ」と励ましていました。グラウンドで練習をすればするほど力が付き、それが給料に跳ね返ってくるということ。例えとして言ったものです。それにならえば、福祉の現場には学びの材料は至るところにあります。福祉とは、何よりもまず支援を必要とする人たちの生きづらさを、肌身感じるところから出発します。現場できららと接し、「なぜ?」と、思い巡らす中で「あつ! そうか」と気づき、その思いを深めることによって、自分の支援力を高めることができます。知識としてではなく、身体に浸み込む学びです。そして、さららの生きづらさは本人の課題というより環境の要因が大きいと気づくとき、自分自身の問題として受け止め、学びを深めることにつながるのではないでしょうか。



肉藤さんの生け花教室は20数年前に始まりました。昨年12月の正月花で、相田さんは親子で、向井さんはいつも軽トラの中、母を待つ。地域の芳名会、20名以上の方の顔が写る。思いのたけ、人が声をかけやってくれることをやる。人の親として、何おれ、それは「ひとは」おれのため。お元気で。春後 順子